目白大学　健康科学研究
第11号　2018年　95－104

保健医療学部・看護学部１年生における心理学リテラシーの特性

時田みどり　金野達也　野村健太　奈良雅之
（Midori TOKITA　Tatsuya KANENO　Kenta NOMURA　Masayuki NARA）

【要約】

《目的》保健医療学部・看護学部を対象として、正規の心理学教育を受ける以前の心理学リテラシーの特性を検討し、心理学教育を効果的に行うための留意点を考察した。

《方法》初年度生を対象として、「心理学についての理解」「心理学のイメージ」「心理学を学ぶとできること」に関する質問項目と、「心理学の学習経験」及び「心理学が貢献できると思われること」についての自由記述で構成される質問紙調査を行った。

《結果》心理学のイメージとして、「非科学的」「文系的」「親近感」因子が抽出された。役立つこととして、「カウンセリング」「対人関係スキル」「他者理解」因子が抽出された。自由記述では、対人関係スキルにおける心理学への過度な期待が示唆された。

《考察》心理学について、実像とは大きく乖離した概念が形成されていることが示唆された。また、それらに基づいた心理学への期待が示された。既存の誤概念を考慮に入れた心理学教育プログラム構築の必要性が示唆された。

キーワード：心理学教育、心理学リテラシー、基礎教育

Ⅰ．はじめに

リハビリテーション科学、看護学の領域において、対象者の心理的側面への理解の重要性が指摘され、心理学は基礎を担う重要な科目のひとつになっている。単に一般教養としての心理学ではなく、それぞれの分野において有用な、心理の専門知識を提供する役割を期待されている。実際に、心理学を学んだ看護学生はそうでない学生に比べ対人関係が治療過程に影響することを理解し、患者に適切な接し方をするなど[1)]、看護の現場での心理学的知識の有用性が指摘されている[2)]。また、リハビリテーションにおけるセラピストの心理的支援の役割[3) 4)]や、リハビリテーションを効果的に行う上での論理的背景としての知覚・感覚心理学の重要性も明らかにされている[5)]。さらに、リハビリテーションや看護の専門家が、キャリアの途中で、健康心理学、医療心理学、リハビリテーション心理学等の心理学の応用領域を学習し、活躍範囲を広げる機会も増えていると言われる[4)]。

一方、実証科学の手法をとる心理学の実像は、必ずしも正確に把握されてはいるとは言えない[6) 7)]。心理学教育の指針を掲げているアメリカ心理学会（APA）及び日本心理学会では、心理学について、「心と行動の関係を科学的に研究」する学問であると定義し、その基本領域として、「行動の生物的基盤」「感覚と知覚」「学習」「記憶」「生涯発達」「個人差」「動機付けと感情」「心理的障害」を挙げている[8) 9) 10)]。科学としての心理学は、社会科学及び自然科学の諸科学とも繋がりがあり、統計学をはじめ、神経科学や情報科学が重要なツールとなっている。しかし、一般的には、心理学を学習すれば「悩みの解決に役立つ」、「自己理解が深まる」、「心の支援に役立つ」などの、心理学へ

ときたみどり：目白大学保健医療学部作業療法学科
かねのたつや：目白大学保健医療学部作業療法学科
のむらけんた：目白大学保健医療学部作業療法学科
ならまさゆき：目白大学保健医療学部理学療法学科

の安易な期待の根拠となっている[11]。このような心理学に対する偏ったイメージや、それに基づく過度な期待や本来の役割の矮小化の背景には、心理学についての概念が、ポップカルチャーやマスメディアで紹介される断片的な知識から構成されていることや[12]、高等学校で提供されている心理学情報が、「自己理解」「ストレスへの対処」等、臨床心理学的な内容に限られていることなどがある[13][14][15]。また、心理学の研究対象への関心は高いにもかかわらず、その研究方法についての理解に乏しいことも指摘されている[15]。

注意すべき点として、心理学についての偏った概念は、その本質的な理解の妨げとなるとともに、心理学の学習を困難なものにしていることが挙げられている[7][12][17]。したがって、偏りのある概念を前提として心理学教育を行う際には、それらを踏まえた上での授業プログラムの設計が重要となる[12][17]。

これまで、適切な心理学教育を目的として、心理学の専門教育を受ける以前の大学生を対象に、「心理学についてどのようなイメージを持っているか」、「何を期待しているか」等の問題に関する様々な研究が行われてきた[12][16][17][18]。松井[16]は、心理学を初めて学ぶ医学部・看護学部の学生を対象に調査を行い、心理学は、「神秘的で、難しそうで、つかみどころがない」というイメージが持たれていること示している。また、幾つかの回答からは、テレビ番組や、マスメディアの影響が観られたことが報告されている。工藤らは[12]、心理学に関する「素朴概念」についての調査を行い、心理学の研究対象・方法論についての認識が著しく狭く、人間の感情的側面の共感的理解にとどまることを示している。また、「心理的問題の解決・軽減」によって多様な社会的問題の解決に寄与できると考えられていることを示している。さらに、心理学専攻の学生を対象とした岩崎らの調査では[18]、心理学は、「地味で理系的で難しそう」「明るくて楽しい」「脳研究や夢、占いとのかかわりがある」といったイメージの持たれていること、また、心理学を学ぶとできることとして、「カウンセリング」「人間理解」「コミュニケーションスキルの向上」等があげられている。このような正規の学習が開始される以前の学生が持つ、偏った「心理学観」には、「科学としての心理学」という観点が欠落していることが問題として挙げられている。

本研究では、保健医療学部・看護学部における効果的な心理学教育に役立てることを目的として、保健医療学部・看護学部の１年生を対象に、1）心理学についての理解 、2）心理学についてのイメージ、3）心理学を学ぶとできること、の３点について、質問紙による調査を行った。また、4）心理学の学習経験とその内容、5）各自の専門における心理学の役割、の２点について、自由記述による調査を行った。本研究の新たな試みとして、イメージの抽出にとどまらず、心理学についての理解度を測定し、具体的にその知識の偏りの傾向を示した。また、「各自の専門における心理学の役割」について自由記述を求め、学生の具体的な心理学像の把握を試み、量的調査との関連性を検証した。調査結果を踏まえて、初年度の心理学教育における心理学教育プログラムの方向性を考案した。

Ⅱ．方　法

１．調査時期及び分析対象者

調査対象者は、１年時の共通選択科目である「人間関係論」受講希望の保健医療学部学生197名、看護学部学生106名の計303名であった。なお、2016年の入学者は、保健医療学部202名、看護学部114名であり、調査対象者の入学者数に占める割合は、保健医療学部98%、看護学部92%であった。このことから、本学の医療系学部のほぼ全体像を反映しているものと考えた。

調査時期は、2016年４月８日～2016年４月14日の授業紹介時に行った。時期的に、大学での心理学関連科目の履修開始以前のイメージや心理学についての期待感、理解度を把握することができるものと考えた。

２．調査項目

質問紙は、「心理学についての理解」、「心理学のイメージについて」、「心理学を学ぶとできること」の３種類の質問項目群と、「Q1 心理学について学んだこと」と「Q2 各自の専門職にどのように役立てられると思うか」の２項目についての自由記述で構成された。

「心理学についての理解」は、これまでの授業における学生の反応及び一般的に指摘される心理学の誤概念をもとに、筆者が作成した。各設問項目に対して、「はい」「いいえ」「わからない」のうち、該当する回答を選択してもらった。「心理学についてのイメージ」

についての12項目と「心理学を学ぶとできること」についての20項目は、先行研究[13) 16) 17) 18)]を参考に作成した。全ての質問項目において、「1. まったくちがう　2. ちがう　3. どちらともいえない　4. あてはまる　5. よくあてはまる」の５件法を用いて回答を求めた。自由記述については、各項目につき、２行の記述欄を設けた。

３．手続き

初回授業開始時に、アンケート内容が記載されたプリントを配布した。全員一斉にアンケートへの回答を開始し、各自のペースで回答を行った。所要時間は５～７分程度であった。終了後、直ちに回収した。

質問紙への回答に際し、個人情報の取り扱いには十分に注意し、回答をもって、研究協力に同意を得たとすることを伝えた。また、研究協力の有無によって、何ら不利益を被ることがないことを伝えた。

Ⅲ．結　果

１．「心理学についての理解」

図１に、「心理学についての理解」の設問項目と回答の割合を示す。有効回答数は、301であった。以降、回答の割合を理解度とする。全ての設問において、正答率は50％に満たなかった。認知心理学を「認知症患者の行動理解の研究」と考えている学生が40％近くおり、正答者は10％に満たなかった。「血液型性格判定は心理学でも支持されている」では、正答率は25％と低く、科学的に根拠のない性格診断に疑いをもたないものが多数いることが示された。「心理学の研究者は、すべてカウンセラーの資格を持っている。」という問いについても、正答率は25％と低く、心理学系の資格についての認識の乏しいことが示された。一方、「心理学では、統計手法を用いた分析が必要である。」「カウンセリングの技術に関連するのは、臨床心理学である」等については、凡そ半数が正解し、誤りは10％未満であった。「正解」を２点、「解らない」を１点、誤答を０点として、被験者ごとに総合得点を求め、理解度得点とした。平均点は、20点満点中、11.8点（SD = 2.3）であった。

２．「心理学のイメージ」について

有効回答数は、301であった。心理学のイメージについての12項目の平均値、標準偏差を求めた（表１）。結果から、「Q1 心理学は難しそうな学問だ」と「Q2 心理学は楽しそうな学問だ」の２項目で、高い得点が示された。

次に、これらの12項目に関して、因子分析（Kaiserの正規化をともなう主因子法）を行った結果、「Q1 心理学は難しそうな学問だ」、「Q7 客観的である」、「Q10 神経科学とのかかわりが深い学問である」「Q12 心理学は夢のない学問である」の４項目については、因子抽出後の共通性が、.20未満であったため除外し、再度因子分析を行った。その結果、累積寄与率は74％で、因子の解釈可能性により３因子解を採用した（表１）。第一因子は、「Q9 宗教との関わりが強い」「Q8 占いとの関わりが深い」の２項目で構成され、両項目とも因子負荷量が高かいことから、非科学的な

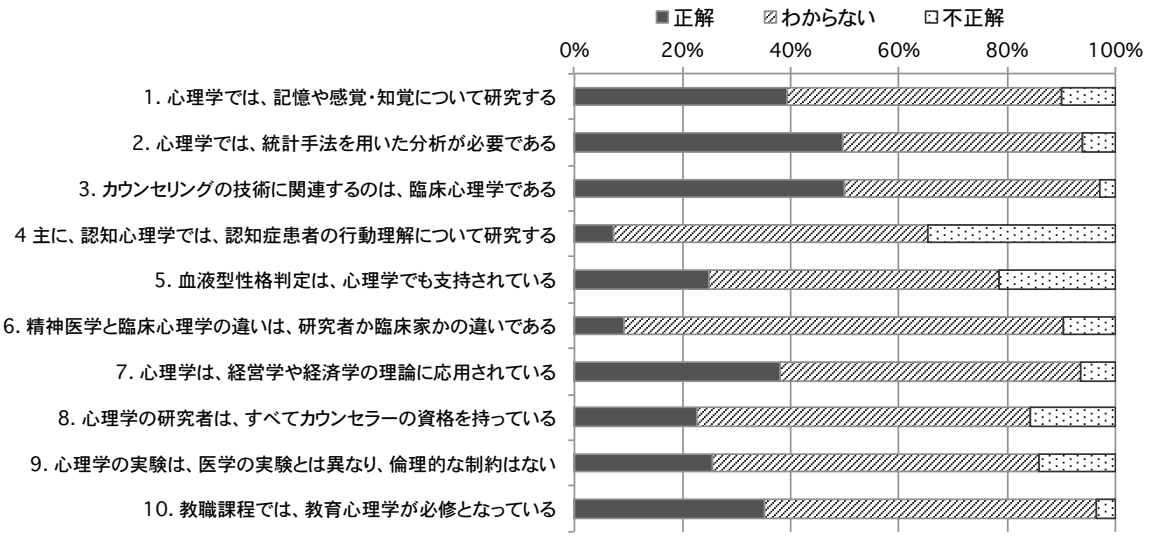

図１　「心理学についての理解」の設問項目と回答結果（N＝301）

表１ 「心理学のイメージ」の平均値と因子分析結果（Kaiser の正規化を伴うバリマックス回転）

		因子			Mean (N=302)	SD
		非科学的	文系的	親近感		
Q9	宗教との関わりが強い	**.80**	.08	−.14	2.96	0.96
Q8	占いとの関わりが深い	**.65**	.05	.12	3.11	1.05
Q4	文系的な要素が強い	.10	**.73**	.05	3.73	0.87
Q5	理系的な要素が強い	−.02	**−.69**	.09	2.81	0.84
Q11	心理学は親しみやすい	−.01	.00	**.74**	3.31	0.85
Q2	心理学は楽しそうな学問だ	.01	−.03	**.53**	3.99	0.81

除外項目		Mean	SD
Q1	心理学は難しいそうな学問だ	3.75	0.80
Q3	曖昧で、とらえどころのない学問である	3.45	0.82
Q6	実践的である	3.61	0.83
Q7	客観的である	3.64	0.75
Q10	神経科学とのかかわりが深い学問である	3.59	0.84
Q12	心理学は夢のない学問である	2.51	0.79

要素との関わりを表す因子と解釈して、「非科学的」因子とした。第２因子は、「Q4 文系的な要素が強い」「Q5 理系的な要素が強い」の２項目で構成され、後者では因子負荷量が負の値であることから、文系的な要素が高く理系的な要素の低さを表す因子と解釈して、「文系的」因子とした。第３因子は、「Q11 心理学は親しみやすい」、「Q2 心理学は楽しそうな学問だ」の２項目で構成され、親しみやすさや楽しさを表す因子と解釈して「親近感」の因子とした。各因子の信頼性分析の結果、クロンバックのα係数は非科学的理解では .67、文系的では .66、親近感では .56と、中程度の信頼性となった。

３．「心理学を学ぶとできること」について

有効回答数は、301であった。「心理学を学ぶとできること」についての20項目の平均値、標準偏差を求めた（表２）。これら20項目に関して、因子分析（Kaiser の正規化を伴うプロマックス回転）を行った結果、「Q7 自分がどのような人間かを理解することができる」では、因子抽出後の共通性が .23未満であったため除外し、再度因子分析を行った。その結果、累積寄与率は58％で、因子の解釈可能性により３因子解を採用した（表２）。第一因子は、因子負荷量の大きい順に、「Q10 カウンセリングができるようになる」、「Q9 人の悩みを解決することができる」、「Q8 人の心のケアができるようになる」、「Q11 人の心を理解し、適切なアドバイスすることができる」、「Q12 プロファイリングを行うことができる」、「Q14 医療現場で、相手の心理状態を理解するのに役立つ」、「Q13 教育場面での生徒指導に役立つ」、「Q6 他の人たちのもつ精神的問題を理解しやすくなる」の７項目で構成され、他者の心を理解して相談にのる、心のケアをする等、カウンセリング的な役割を表す因子と解釈して、「カウンセリング」因子とした。第２因子は、「Q20 人との会話をスムーズに行えるようになる」、「Q19 嫌な相手とも、うまくつきあえるようになる」、「Q18 人をうまく説得できる」、「Q17 人に騙されにくくなる」、「Q15 ストレスを感じたときに自分の対処に役立つ」、「Q16 人間関係の改善に役に立つ」の６項目で構成され、他者とのコミュニケーションを円滑にはかり、人間関係の問題を回避したり解決したりする役割と解釈して、「対人関係スキル」因子とした。第３因子は、「Q2 他者の考えていることが理解できるようになる」、「Q3 相手の性格がわかる」、「Q4 次に相手が、どう行動するかがわかるようになる」、「Q1 人間の理解が深まる」、「Q5 心の問題を見抜く事ができるようになる」の５項目で構成され、他者の考えや性格を理解する役割と解釈して、「他者理解」の因子とした。各因子の信頼性分析を行った結果、α係数は、カウンセリングでは .86、対人関係スキルでは .86、他者理解では .81と、適切な信頼性が確保された。

４．理解度と各因子間の関係

（１）理解度と各因子との相関関係の予測要因

回答者別に、「心理学についての理解」で得られた

表２　「心理学を学ぶとできること」の平均値と因子分析結果（Kaiser の正規化を伴うプロマックス回転）

		因子			*Mean* (N=301)	*SD*
		カウンセリング	対人関係スキル	他者理解		
Q10	カウンセリングができるようになる	**.86**	−.10	−.01	3.92	0.78
Q9	人の悩みを解決することができる	**.74**	.01	.03	3.86	0.78
Q8	人の心のケアができるようになる	**.71**	−.08	.10	4.10	0.69
Q11	人の心を理解し、適切なアドバイスすることができる	**.70**	.04	.04	3.81	0.73
Q12	プロファイリングを行うことができる	**.62**	.05	−.17	3.49	0.77
Q14	医療現場で、相手の心理状態を理解するのに役立つ	**.54**	.05	.09	4.25	0.60
Q13	教育場面での生徒指導に役立つ	**.45**	.26	−.10	3.82	0.74
Q6	他の人たちのもつ精神的問題を理解しやすくなる	**.41**	.03	.24	4.07	0.63
Q20	人との会話をスムーズに行えるようになる	−.10	**.87**	.01	3.62	0.82
Q19	嫌な相手とも、うまくつきあえるようになる	−.07	**.87**	−.05	3.56	0.83
Q18	人をうまく説得できる	.02	**.79**	−.09	3.57	0.80
Q17	人に騙されにくくなる	.06	**.67**	.03	3.30	0.88
Q15	ストレスを感じたときに自分の対処に役立つ	.12	**.50**	.02	3.75	0.82
Q16	人間関係の改善に役に立つ	.24	**.43**	.11	3.86	0.77
Q2	他者の考えていることが理解できるようになる	−.11	−.14	**.93**	4.05	0.76
Q3	相手の性格がわかる	−.05	.11	**.75**	3.92	0.71
Q4	次に相手が、どう行動するかがわかるようになる	.02	.19	**.61**	3.61	0.86
Q1	人間の理解が深まる	.14	−.13	**.52**	4.32	0.60
Q5	心の問題を見抜く事ができるようになる	.29	.15	**.35**	3.77	0.80

因子間相関	カウンセリング	対人関係スキル	他者理解
カウンセリング	--		
対人関係スキル	0.612	--	
他者理解	0.694	0.535	--

除外項目		*Mean* (N=301)	*SD*
Q7	自分がどのような人間かを理解することができる	3.96	0.71

得点の合計点をもとめ、理解度得点とした。理解度得点と「心理学のイメージについて」、「心理学を学ぶとできることについて」で抽出された各因子間との相関関係を検討したところ（表３）、理解度得点と親近感とに、わずかな相関 $r = 0.13$（$p < .05$）が認められた。次に、回答者別に、各因子を独立変数、心理学の理解度得点を説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。結果から、決定係数は .47 となり「親近感が高いと、理解度が高い傾向にある」（$\beta = .35$, $p = .0\ 38$）ことが示唆されたが、$R^2 = 0.011$ と、説明力はかなり低いため、理解度に対する「心理学のイメージ」や「心理学への期待」の予測性は、ほとんど見られないと解釈された。

表３　理解度と各因子との相関関係

	理解度得点	カウンセリング	対人関係スキル	他者理解	非科学的	親近感	文系的
理解度得点	1.00						
カウンセリング	−0.02	1.00					
対人関係スキル	0.03	.68**	1.00				
他者理解	−0.01	.78**	.61**	1.00			
非科学的	−0.13	.20**	.24**	.18**	1.00		
親近感	.13*	.22**	.13*	.22**	−0.08	1.00	
文系的	−0.01	0.07	0.10	.12*	.438**	−0.07	1

**は1%、*は5%水準で有意な相関があることを示す．N=301

5．自由記載についての分析結果

（1）「Q1：心理学について学んだことがあれば、書いて下さい」への記述

69名が記述回答をし、その他は無回答であった。回答内容のうち、心理学についての学習の経験や何らかの知識を記述したものは、17名であり、62名は「特にない」「学んだことはない」といった内容の記述であった。無回答を含めると、意識的に心理学について学んだことのない者が多数を占めることが示された。学んだ心理学の内容は、占いや精神疾患、色の効果やスポーツ心理学などであった（表4）。

（2）「Q2：心理学は、あなたの専門職にどのように役立てられると思いますか」の質的内容分析

得られた69名の記述内容を、質的内容分析[19]に則って分析した。表5にカテゴリーとサブカテゴリー及び記述内容の典型例を示す。分析の手順は、回答を繰り返し読み、1つの回答の中でまとまりのある文脈が2つ以上ある場合はデータを分けた。回答の中の注目すべき語句を抽出し、内容の類似性によって分類し、サブカテゴリーの名前を付けた。サブカテゴリーとデータが一致しているか、分類の基準が妥当かどうか継続的に検討した。サブカテゴリーを類似性により分類し、カテゴリーの名前を付けた。分析は分析担当者1名で行い、後に共同研究者全員で分析の妥当性を確認した。以下に、カテゴリーは〈　〉サブカテゴリーは［　］で示す。〈患者や家族への適切なケアに役立つ〉は［患者の心のケアができるようになる］、［患者の心理的な困難感を除去する］、［患者の不安を緩和できる］、［言葉のケアができる］の5つのサブカテゴリーで構成された。〈患者を理解できる〉は、［患者の心理を理解できる］、［患者の感情を理解できるようになる］、［心理を読み取ることができる］、［患者の立場になって考えることができる］の5つのサブカテゴリーで構成された。〈人との関係性に役立つ〉は、［患者や職場での人間関係に役立つ］、［寄り添うことができる］、［患者との関わりに役立つ］、［スムーズなコミュニケーションに役立つ］の4つのサブカテゴリーで構成された。〈実践力が身につく〉は、［より良いリハができる］、［場と人に合わせて適切に対応する］、［自分自身をコントロールできる］、［目指す看護師像に近づく］の4つのサブカテゴリーで構成された。

Ⅳ．考　察

本研究では、効果的な心理学教育の授業プログラムの構築を目的として、心理学の学習前に学生が持っている心理学へのイメージ及び心理学への期待についての調査を行った。先行研究で用いられている質問項目に加え、心理学についての理解度を測定し、さらに、自由記述によって具体的な学生の学習経験や期待感について検討した。

表4　「Q1　心理学について学んだこと」への自由記述

メンタリストの本読みました
人は次にどのような行動をとるのか、心理的な面で考えるというのを行ったことがある
手そう占い
人は嘘をつくと右上を見る？？？フリバク効果
パニック障害について
思考することは全て脳という内側ですることだが、必ず小さくでも行動に現れているという等
友人関係など
つり橋効果：つり橋で告白すると、吊り橋の揺れが心臓のリズム（鼓動）と、告白された人はokすることが増えるというもの
患者の心理について
あるドラマで、臨床犯罪心理というのを知った
スポーツ心理学の一つで覚えているのが、試合前などの緊張している時、″ここにライオンはいないよ″と自分に言い聞かせると、脳と意識の繋がりで人間の本能的な働きを生かし、緊張を抑えることができる
ブログなどを読んで学んだ。相手の嫌なところが見えたら、自分の悪口を言われたら、それは相手が自分をうらやましいと思っていること
吊り橋効果
社会心理学（隠したいことがある時に鼻をさわる）は知っています。少し。
青いお皿と赤いお皿に食べ物を置いた時に、青いお皿に置いた方が、食欲が減少する
カウンセラー
高校の先生が心理学に詳しくてメンタルトレーニング無意識について教わりました

表５　「Q2　心理学は、あなたの専門職にどのように役立てられるか」自由記述のカテゴリー化

カテゴリー	サブカテゴリー	データの例
患者や家族への適切なケアに役立つ	患者の心のケアができるようになる	患者さんの心のケアに役に立つと思う／患者さんの心を支えることができる
	個人個人に合わせたケアができる	患者さん一人一人の性格にあったケアを考えることできると思う／相手の行動や動作、気持ちの状態などから相手にあった治療をしていくことができると思う
	患者の心理的な困難感を除去する	患者さんの苦しみや打ちあけられないもの、ストレスになってしまうものなど、心の闇を取り除ける／患者さんの悩みなどを少しでもプラスに考えられるように役に立つ。
	患者の不安を緩和できる	患者さんの心を安定させることができると思う／者さんの不安を取り除き心のケアに役に立てられると思う
	言葉のケアができる	言葉によって、人を心理的に癒すことができると思う／患者にかける言葉によって、心のケアもできる
患者を理解できる	患者の心理を理解できる	患者さんの気持ちを理解するのに役に立つ/患者さんの精神状態を理解するのに、役立てられると思います。
	患者の感情を理解できるようになる	患者さんの気持ち理解する／相手の心情を理解するのに役に立つと思う
	患者の考えを理解できるようになる	患者さんとコミュニケーションをとる時にどのようなことを考えているかを理解／患者さんとコミュニケーションをとる時にどのようなことを考えているかを理解
	心理を読み取ることができる	表情や仕草で言葉にならない思いやきもちを汲み取りやすくなると思う／患者の精神的な内面を読み取る力
	患者の立場になって考えることができる	相手の立場になって考え、理解を深める時／相手の気持ちになり、親身になって考えることができる
人との関係性に役立つ	患者や職場での人間関係に役立つ	より良い人間関係を築いていくために役に立つ／患者さんや職場仲間などの関わりに役立てられる
	寄り添うことができる	心により添うことができる／心理学の知識を生かし、相手の心の痛みや不安を理解し、より添うために役に立つと思います
	患者との関わりに役立つ	患者さんが思っていることや感じていることを読み取り、会話をしながら心の面でも接していくことができる／患者との距離を縮める
	スムーズなコミュニケーションに役立つ	患者さんの心情を理解し、適切な処置やコミュニケーションをとる/患者さんの悩みを聞く時に役に立てられると思う
実践力が身につく	より良いリハができる	話すことのできない人の考えをある程度理解できるようになることでスムーズなリハビリができる／治療する患者さんの心理状態を理解した上で、リハビリすることができるようになる
	場と人に合わせて適切に対応する	その場に合った適切な処置をしてあげたい。／自分の働きかけが患者にどのように影響を来すのか自己分析できるようになれば良いと考える
	自分自身をコントロールできる	自分自身に関しても、心理学を学ぶことで、ストレスなどが緩和されると思う／自分の感情をコントロールして、患者さんに迷惑をかけないようにする
	目指す看護師像に近づく	看護師になった時、患者さんの気持ちを理解できるようになり、心に寄り添って、ケアをできるようになると思います／看護師として、患者の心のケアが上手にできそう

１．初年度生における心理学リテラシーの特性

「心理学についての理解」では、先行研究で指摘されている傾向と同様に、心理学について偏った理解がなされていることが示された。顕著な例として、認知心理学を「認知症患者の行動理解の研究」と考えている学生が40％近くおり、正答者は10％に満たなかった。 認知症という知識が、認知心理学について誤った概念を形成させていることが予測される。「心理学のイメージ」については、「非科学性」「文系的」「親近感」の３つの要素が抽出され、多くの学生が、占いや血液型判断と心理学を隣接したものであると考えていることが示唆された。同時に、「文系的」であるいう因子が抽出されていることから、多くの先行研究で示されている傾向と同様に[12）16）17）18)]、心理学の実像に反して、「科学としての心理学」という観点が欠如していることが示された。また、「Q5 理系的な要素が強い」で、顕著に低い得点が示された。これは、日本では、一般的に心理学科が文系科目として扱われており、高等学校の進路指導時に文系進学者が志望することから推察されよう。ただし、心理学専攻の学生を対象とした岩崎らの研究[18)]と一部異なる結果となった。即ち、岩崎らでは、心理学専攻の学生において、「地味で理系的な要素が強く難しいイメージ」が。印象の１つとして示されていたが、医療系学部生を対象とした本研究では、「非科学的で文系的」なイメージが示されていた。岩崎らとの相違を説明する理由の１つには、心理学専攻の学生は、進路選択過程において心理学を構成する他の領域（統計学、神経科学等）の存在をある程度認知しているのに対し、医療系進学者は、自分たちの専門は、文理の中間くらいあると認識していることから[20)]、相対的に「心理学は文系である」というイメージが形成されている可能性が考えられる。「心理学は、楽しく親しみやすい」というイメージは、先行研究で指摘されている傾向と同様であっ

た。マスメディアやインターネット上での心理学に関する情報に、ゲーム的、娯楽的な要素が多く含まれることに起因すると考えられよう。「心理学は難しい」というイメージは、先行研究[18]と一致するものであった。

「心理学を学ぶとできること」に関しては、「カウンセリングや他者理解に役立つ」「対人関係スキルが向上する」となり、入学時において、対人関係における心理学の役割に高い期待をもっていることが示された。抽出された因子は、同様の20項目を用いた岩崎ら[18]と類似した結果となり、専攻に関わらず、心理学に、カウンセリングや人間関係の向上の役割を期待していることが示唆された。

自由記述の「Q1 心理学について学んだこと」においては、殆どの学生で心理学関連の学習経験がなく、記述された内容も断片的で偏った知識であった。このことから、「心理学のイメージ」において示されたイメージの形成は、非意図的に形成された根拠に乏しいものであることが推察される。「Q2 あなたの専門職にどのように役立てられると思うか」については、「患者を精神的に支える」といった記述が多数みられた。カテゴリー化された項目では、「心理学を学ぶとできること」で示された結果と内容的な一致が示され、医療系の学生は、何らかの形で「心理学が自らの専門領域に役立てられるか」という点について、かなり具体的で一貫したイメージを持っているとことが示唆された。また、その内容は、臨床心理学への期待に限定されていた。

2．初学者への心理学教育おける留意点

本研究の結果から、本学の保健医療学部・看護学部の1年生においても、先行研究と同様に、心理学は「人の感情的な側面を扱うもの」、「対人的な問題を解決するもの」という偏りのある概念が形成されていることが明らかになった。先行研究[13][16]が指摘しているように、このような偏った概念や限定的な役割理解は、心理学の中核をなす「行動の生物的基盤」「感覚と知覚」「学習」「記憶」が提供しうる知見を過小評価し、心理学の目標を限定的してしまう危険性を孕んでいる[12][16][18]。心理学の本質的な理解を促すには、心理学の入門教育において、偏った概念の根本的な転換を生じさせるような授業プログラムが必要となる[12]。特に、「実証的な科学としての心理学」という理解の欠落については、知識の提供によって認識の拡大をはかるだけでは十分ではなく、心理学が実証科学であることを明示する研究例や方法論という視点から、心理学をとらえ直させる必要があるだろう。

そのための具体的な授業方針として、以下の3つの試みが有効であると考えられる。一つ目に、初学年での心理学の導入過程において、心理学の実証科学的な側面に比重を置いた授業計画を組むことが重要であろう。具体例としては、これまでの授業において、学生の興味関心を引くために行ってきた性格診断アンケート等の紹介を最小限に止め、「記憶」「知覚・感覚」「思考」に関するデモストレーション実験等が有効であろう。2つ目に、さまざまな心理検査や評価法についての解説において、そこから得られる個人の特性についての説明にとどまらず、心理検査や評価法の作成過程や、その統計的な信頼度やその検証方法に重点を置いた解説を加えるべきであろう。3つ目に、マスメディアや出版、インターネット上で一時的に流行する心理学の知見については、必要に応じて、専門的な解説が必要であろう。例えば、数年前にアドラー心理学が専門性の欠落した形で流布し、一部の専門家から問題の指摘があったが、そういった流行現象に適切に対応すべきであると考えられる。

3．本研究の限界と問題点と今後の課題

本研究では、医療系学部生全体を対象として検討を行った。しかし、同じ医療系学部においても、リハビリテーションを専門とする保健医療学部と看護学部では、異なる傾向が示される可能性がある。今後、学部ごと、あるいは学科ごとの分析を行い、より詳細な心理学リテラシーの特性を把握する必要があると思われる。また、上記に示した点を踏まえて、具体的な授業プログラムを実施し、その効果の検証を繰り返しながら、心理学リテラシーの向上に有効な心理学教育カリキュラムを作成していく必要があるだろう。

【文献】

1）Napoletano, M, A.: The effects of academic instruction in psychology on student nurses' attitudes toward mental illness. Teaching of Psychology, 8, 22-24（1981）
2）石井秀宗，村松仁：看護学生が抱く心理学の有用観についての検討．心理学研究71（2），136-143（2000）

３）山口加代子：脳損傷後のリハビリテーションにおける心理士の役割，第31回日本心理臨床学会発表論文集，1-24（2011）
４）丹野義彦，利島保：医療心理学を学ぶ人のために．世界思想社（2009）
５）樋口貴広，和泉謙二，真下英明，種村留美：知覚に根ざしたリハビリテーション，シービーアール（2017）
６）大橋恵，岩崎智史，皆川順：心理学に対するイメージ（２）一般市民対象のオンライン調査より―．東京未来大学研究紀要，vol5, 11-20（2012）
７）楠見 孝，山 祐嗣，益谷 真，星野崇宏：市民の心理学リテラシー調査 日本心理学会第75回大会シンポジウム「心理学の社会への貢献とは」発表資料（2011）
８）鹿取廣人，杉本敏夫，鳥居修晃：心理学［第５版］東京大学出版会（2015）
９）The Task Force on Undergraduate Psychology Major Competencies. American Psychological Association. Undergraduate Psychology Major Learning Goals and Outcomes: A Report. American Psychological Association（2002）
10）Nolen-Hoeksem, S:.Atkinson and Hilgard's Introduction to Psychology, Cengage Learning EMEA（2014）
11）大橋恵，岩崎智史，藤後悦子：心理学を学ぶことの効果について―心理学の学習がその後の社会生活にどのように役立ったか―．東京未来大学研究紀要，vol6, 13-21（2013）
12）工藤与志文，鈴木健太郎，小林好和：大学生の心理学における「素朴概念」―本学人文学部生を対象にして―．札幌学院大学人文学紀要，76，1-16（2004）
13）仁平義明，高橋美保：高校生になぜ心理学教育をするのか―大学と高校の心理学教育の目標のちがい―．白鳳大学教育学部論集，５（１），93-114（2011）
14）高橋美保，仁平義明：心理学は高校「倫理」教科書でどのように扱われているか．日本心理学会第74回大会発表論文集 1169（2010）
15）南風原朝和，市川伸一，下山晴彦編：心理学研究法入門 調査・実験から実践まで．東京大学出版会（2010）
16）高島直子，中村延江：美容専門学校生の心理学観（II）1998年（五十嵐他，1999）との比較，山野研究紀要，10，59-66（2002）
17）松井三枝．はじめて学ぶ「心理学」に対するイメージの変化 ―「心の科学」受講前後の調査から―富山医科薬科大学一般教育，23，63-68（2000）
18）濃野信・岩崎智史，大橋 恵，皆川 順：心理学に対するイメージ（１）心理専攻学部生と非心理専攻学部生を対象とした横断的研究，東京未来大学こども心理学部紀要，５，1-9（2012）
19）ウヴェ・フリック（著），小田博志（翻訳）：質的研究入門―“人間の科学”のための方法論．393-400，春秋社（2011）
20）小園真知子．言語聴覚教育の現状と今後の課題．保健科学研究誌，９，1-6（2012）

（2017年10月６日受付、2017年12月４日受理）

Assessment of psychological literacy of undergraduate students before receiving formal psychological education

Midori TOKITA[1], Tatsuya KANENO[1], Kenta NOMURA[1], Masayuki NARA[2]

【Abstract】

Objective: This research aimed to examine the psychological literacy of undergraduate students who major in health sciences and nursing.

Methods: We surveyed 303 undergraduate students using a questionnaire that tests their basic understanding of psychology, view of psychology, and expectation for psychology prior to their specialized education.

Results: We found that respondents (1) had a limited understanding of the objects and methods of psychological research, (2) had a biased view of psychology, undermining the scientific aspects of psychology, and (3) tended to overestimate the effectiveness of psychological solutions on interpersonal problems.

Conclusions: The results indicated that curriculum for the elemental psychological education should be reorganized and reformed at the university.

Keywords : Psychology education, Psychological literacy, Elementary education

1）Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Science, Mejiro University
2）Department of Physical Therapy, Faculty of Health Sciences, Mejiro University